

や  
け  
ど

## 中谷喜久子

「雪の中を歩いていたら『あなた東北人でしょう』と言われたのよ」——東京在住の妹の電話の声に、珍らしい大雪にとまどっている都会人の生活が伺われた。と同時に大人になってからの生活が長くても、子供の頃の体験はその人に染みこんでいて思いがけない時に表れるものだとの思いをあらたにした。彼女は雪の道を危なげなく（転ばずに）歩いてきたからだ。都内の雪道での転倒・骨折・救急車の話題が全国ニュースになった三年前

のことである。以来この季節になると、生まれ育ち住み慣れた我が街の、毎日、幼稚園へ通う冬の道をしみじみと眺めるようになった。歩道は少しの雪が降っては踏みかためられ、薄日にとけては凍りして、ツルツルデコボコと固く凍りついている。防寒具に身を包んで私は歩く。足の底全体で地面を踏みしめる様に歩く。「転ばぬように」という意識はないのだが、転ばぬように歩いている。足元が不安定になった瞬間に、バランスを取っている。それにしてもよく今まで転びもせずに歩いてきたものだと思う。やはり、雪の道、凍りついた道はうっかりすると滑るから危ないということを意識して、そして無意識のうちに「転ばぬよう」気をつけて歩いているのだと思う。

奥羽山脈で東西に分けられた青森県の冬は北と西の日本海側は大雪となり、東の太平洋側、特に県南は乾燥し北西の風で寒気におおわれてしまう。いわゆる寒冷地であるが、積雪地ではない八戸地方は二月がより寒さを厳しく感じる。登園する子ども達を迎える当番になると、

門のところへ立つのにポケットにカイロを忍ばせたりもする。保育室の花びんや小さな植木鉢類は夕方にダンボールの箱に入れ、周囲をおままごと用の座ぶとんや毛布で覆ってひどく凍らぬように気をつける。毎朝各部屋のストーブに点火してからガスでお湯を沸かし、そのお湯で湯沸器や水道の蛇口を暖める。不凍栓を全開（水道管が夜間に凍結しないように水を下げておく事）にしても、蛇口に残っているわずかな水が凍ってしまい水が出てこないからである。朝八時に暖房して、九時頃に室温がマイナス四度前後、十時頃によくやく五・六度にあがる。

私達と同時に幼稚園に着く子がいたりする。「お部屋が暖かくなる所にいらっしやいね」などというが、来て、早く来て遊びたくてやってくる子には意味のない言葉ではある。

子ども達は毛糸の帽子、マフラー、ジャンパー、手袋に防寒用長ぐつ姿がほとんどである。オーバーズボンをはく子は意外に少ない。厚着―薄手に厚手の長袖シャツ

を重ね、上にジャージ、セーター、スモックと上に六七枚、下には薄手に厚手のズボン下を重ねて四枚、のともいるし、素足に上ばきで過ごす子もいる。

気温が低く、強い風が吹きすさぶので、自然に室内で過ごすことが多くなる。ホールは長なわとび、室内鉄棒、飛び箱、大型箱積木等の遊びで賑う。いつもは絵本コーナー・せいさくコーナー・絵画コーナーで楽しんでいるのに、この時季にはストーブの周りに机を運んできてそれぞれのことをしている。今まで開放していた玄関の戸や保育室の戸はその都度閉めるようになり、私達は換気やストーブの周囲の子ども達の動きに気をくばるようになる。

子ども達は雪の日を待っているがなかなか積らない。県内の青森・弘前の積雪地方のように除雪した跡がすぐ埋まるような「雪ふり」はめったにないのである。気温が低いために雪が固まらず雪だるまにならなかつたり、両手で雪をすくって相手にかけたりする雪合戦になったりするが、それでも待望の雪遊び日和になると園庭へ

飛び出して行く。一番人気のあるのは「そりすべり」で、みんな雪をかき集めてジャングルジムのすべり台にスノーボードで滑り降りることが出来るように場所をかためる。この遊びには少しばかり勇気が必要なので、気の弱い子はしばらく見物してから列に並んだりする。すべり台をすべり降り、途中の鉄棒の柱にぶつからぬよう上手に舵をとり、ゆるいカーブでいくと向うのブランコのところまで滑っていく。二人乗りをする子もいる。「せんせいもいれてね」「えー、せんせいもやるんだって」、その先生がすべりおるといつもカーブのところまで横倒しになってしまい子ども達から笑われる。六台の青色赤色プラスチック製のスノーボードが活躍する。砂場のあたりで雪でおままごとをする子たちがいる。雪合戦が始まる。そして遊び終わった後ぬれた手袋などはスノーボードの囲りで乾かす。

五十七・五十八・五十九年度の園日誌の二月を繰ってみた。

57・2・8 (火) 晴 登園の出足が遅く、九時から九時

半。自由遊び・ままごとにN先生が入ってさくら(三歳児)の子たちが楽しそう。「かごめかごめ」で十名のこどもたちがK先生と一緒に長い時間あそび、最後には鬼ごっこになった。

57・2・9 (水) 曇りのち小雪 流感のため臨時休園

2・10 (木) 晴 流感のため午前保育、53名中17名欠、36名出席(内8名かぜひき) みんなで切り紙をした。

2・12 (土) 曇り 異常寒波のためとても寒い日だった。フォークダンス「手のひらを太陽に」パートナ―チェンジを楽しむ。

2・19 (土) 雪時々晴 今年初めての大雪、子どもたちは大喜びで雪だるまを作る。雪合戦をしたり、すべり台を作ったり楽しかった。

58・2・3 (金) 曇り 八時四十分頃からぼつぼつ登園する。新聞紙で刀(サニバルカンの剣)をつくり、それを持って三・四歳児男が遊ぶ。各クラスで鬼の面を

作る。毛糸や紙テープを使う。

2・4 (土) 曇りのち雪 今までに一番寒い朝となる。登園の足が遅い。真冬が続く。

2・15 (水) 晴 年長児、好んで鉛筆で絵を描く。

2・16 (木) 晴 年長組、小学校一年生四クラスの授業を見学に行く。

2・22 (水) 晴 箱積木でおぼけ屋敷・入場券を作って遊ぶ。

2・28 (火) 晴 降り続いた雪が朝には止んで、青空がひろがりおだやかな朝となった。あまり雪が深いので室内で遊ぶ。ホールでは長なわとびが盛ん。

3・18 (水) 晴 ことり組のM・S・A・T達がぶらぶら遊んでいて、あまり片づけなどしないのとこと。きつと充分に楽しんでいないからではないだろうか。気をつけて声をかける事にする。

59・2・11 (火) 晴のち曇り 今年初めての雪あそび。園庭すべり台でそりすべりをした。

2・14 (木) 晴 外で雪合戦、そりすべり、砂場遊

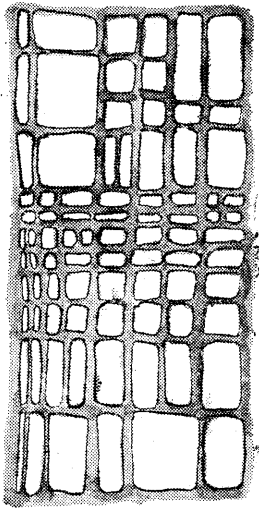
び用の空缶から水を出す等三十名ほど。うさぎ組全員でそりすべり。

……自由遊びに屋外で遊んだ日は思いの他少ないのに驚いた。風がおさまり晴れの日にはほとんどの子ども達が園庭に出て遊ぶのであるが、そのような日はめったにないという事である。晴れていても風が強くこちらの方言の「凍これる」日には「外で遊ぼう」とはあまり言わない。二月はそのような日の連続なのだ。

ほとんどの家庭の暖房が、炭火のこたつと火ばちだけ

だった昭和二十五年頃―私が子供だった頃の子供達は足袋に「かねげた」をはいてすべって遊んだ。田んぼでも滑ったが、田んぼまで出かけるよりは、ほとんど家の近くの道路で遊んだ。馬そり（馬にそりをつけてひかせ）が通ると、それにつかまってすべったりもした。スケート靴は見たことがなかった。スキーで遊ぶことはほとんどなかったように思う。

そのうちに自動車が多く通るようになり、「路上で遊んではいけない」と学校の先生から云われて不満に思っ



たものだった。小学四年の頃だろうか。一つ違いの兄と  
白く光る夜道のまん中を滑ったことを思い出す。数年前  
に、町内の子供会をお世話しておられる年輩の方が「ま  
んず、わらしゃ遊ばねぐなったなす。みなどごの家でも  
テレビ見でる、外サ出なぐなったよ」と話されていた。  
（本当に子供は遊ばなくなりましたね、どこの家でもテ  
レビを見ていて外へ出なくなりました）

現在幼稚園の年長児では二十三名中、スイミングスク  
ール六名、お習字教室七名、ピアノ三名、バレエ一名、  
日舞一名、塾一名それぞれ通っている。テレビ視聴だけ  
ではなく、おけいこ事が幼児の生活に入りこんできてお  
り、小学生ではなおさらということであろう。滑って遊  
ぶスキーやスケートはそれぞれの場所へ行かなければな  
らず、時間的にも空間的にもゆとりが無くなっている。  
暖房のきいた暖かい部屋から凍<sup>こ</sup>れて<sup>は</sup>いる外へ出るには、  
親も子も決心が要る。冷たく寒い戸外での楽しみ様が少  
くなり、あまり楽しまなくなったのは、子どもの生活が  
変わったのではなく、大人の生活の仕方そのものが変化

し、その生活の反映の中に子どもがいるのだと思うので  
ある。

冬休みが終って三学期が始まる頃にはジャンパーやオ  
ーバーを一人で着る事が出来る三歳児が多くなる。「手  
を入れたら指を順々に入れるのですよ」「しっかりと端を  
持ってきちんと中に入れてからファスナーを上へ引っぱ  
りましょう」「袖口を持って脱ぎましょう」「裏返しの袖  
は表にしてから掛けましょう」とその都度指導をする。

四歳男児Hの昨年の今頃のこと、帰りの身仕度をして  
いる時、防寒具のファスナーを一人でしめることが出来  
たので、思わず「お兄さまになりましたね」と声をかけ  
た。数日後、彼の母親から「先生この寒いのに『半コート  
は嫌だ、チョッキを着ていく』といってがんばるんです  
よ」と困った様子で云われた。Hに理由を聞いたら「半  
コートは（ファスナーが）できないけれど、チョッキだ  
と（自分で）できるから」とのことだった。「半コート  
のファスナーもそのうちに一人で出来るようになります  
から、さむーい日には着ていらっしやいね」と話しはし

たが大人の思いの外にある、一人で出来ることの自信とうれしさを大切にしたいYの気持と、甘えん坊の彼がちよっぴりたくましくなった事を思い、私までうれしくなった事だった。

今年度は十月下旬に各部屋にストーブを据えつけた。

大きなストーブに煙突を取り付けて木製の頑丈な枠をまわし、煙突にガードをはめる。紅葉したもみじやいちよの葉を大事に持ってくる子、容器に土と霜柱を入れてきて見せてくれる子、「しもだったのに」と湿ったハンカチをそっとひろげる子、少し前はお山で拾ったどんぐり、「おかあさんのおかあさんのおうちののみやげ」のくりやぶどう、りんごの枝であったが、この時期は遅い秋で賑やかである。十一月の初旬は最高気温十五度等の小春日和りの日が数日続き、中旬に初雪となる。

この季節のこの時―ストーブを据え、煙突にガードをはめる―に条件反射のようにYの顔を思い出す。苦さと懐かしさが混り合って浮んでくるのである。……登園した彼の指にほうたいが巻いてあった。「きのう幼稚園で

やけどをして、病院に行ってきた」とのこと。「私のクラスの子が私の保育室で！」全く気が付かなかったの  
で、驚いて状況を聞いたら「えんとつに指をつけた」と  
のことであった、枠の中の煙突のガードの細いすき間か  
ら指を入れて、煙突にさわったのであった。その日Yの  
家へお詫びに伺った。子どもは思わぬ事をするものだと  
改めて思ったが、我慢して一日を過したその子の痛みに  
気づかなかった保育者としての自分への責めが大きかつ  
た。指がこごえていてストーブに触りたいほど冷たかつ  
たのか、ストーブ本体はヤケドしそうだけど、煙突の方  
はどうかと実験をしたのか、子どもの思いがけない行動  
にもその子なりの理由があったのだと気づいたのは、幼  
稚園の先生をしてしばらく経ってからの事だった。スト  
ーブを使う時期になると、もの静かだったYの面影と若  
かった自分の懐かしいような苦いような思いをこめて、  
「やけどをしないように」と注意するのが常となった。  
今大学生の年頃の彼はその後転居して八戸にはいない。

(八戸小中野幼稚園)